

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月6日現在

機関番号：57301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520041

研究課題名（和文） アンリ研究の基盤作りを目指した〈アンリ哲学の現代思想における意義づけ〉の研究

研究課題名（英文） Study on investigating the signification of Henry's philosophy in the contemporary thought : with the aim of making the social foundation for the Henry's research

研究代表者

川瀬 雅也 (KAWASE MASAYA)

佐世保工業高等専門学校・一般科目・准教授

研究者番号：30390537

研究成果の概要（和文）：本研究の目的の一つはミシェル・アンリという現代思想を代表する哲学者に関する国内の研究状況を活性化させるべく、ミシェル・アンリに関心を寄せる研究者たちの横のつながりを作ることであったが、この目的は「日本ミシェル・アンリ哲学会」の設立によって果たされた。また、現代思想におけるアンリ哲学の意義づけについては、アンリの思想をベルクソン、フッサール、メルロ＝ポンティ、ハイデガー、レヴィナスなどの思想と対比させることで、その意義を明確化する研究発表や著書を刊行した。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to make some relationship among the scholars or researchers interested in the philosophy of Michel Henry, one of the most important philosophers in 20th century, in order to activate the study on him in Japan. This aim is achieved by the foundation of "The Japanese Society of Michel Henry". Concerning the study on the signification of Michel Henry's philosophy in the contemporary thoughts, I published a book and some papers investigating the significance of Michel Henry's thought by comparing it with the thought of Bergson, Husserl, Merleau-Ponty, Heidegger and Levinas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	200,000	60,000	260,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：現代思想、ミシェル・アンリ、日本ミシェル・アンリ哲学会

1. 研究開始当初の背景

(1) ミシェル・アンリの思想は、その重要性にもかかわらず、日本のみならず、ヨーロッパにおいても、実存主義や構造主義などの流行の影に隠れて、正当な評価が妨げられてきた経緯がある。

(2) しかし、2002年のミシェル・アンリの没後、ヨーロッパでは、その再評価の運動が

広がり、フランスに「国際ミシェル・アンリ学会」が設立されたのをはじめとして、各地で、学会、研究会などが開催されるようになり、その研究活動は徐々に活発化する兆しを見せていた。

(3) しかし、日本におけるアンリ研究は、確かに、国際的に高水準の研究を発表している研究者が幾人かおり、また、著書もその半

数程度が翻訳されてはいたが、アンリ研究の裾野の広がりには狭く、アンリ研究に関しては、この幾人かの研究者が個別に独自の研究をしている状況が続いていた。現代思想や現象学関連の学会においても、アンリ哲学について発表する研究者は非常に少なく、アンリ哲学をテーマにする学会や研究会などは開催されておらず、アンリ哲学に関する研究書も一冊しか存在しない状況であった。

2. 研究の目的

(1)「研究の背景」において述べたように、日本におけるミシェル・アンリ研究の裾野の狭さが影響して、アンリ哲学へのアプローチも限定されたものであった。アンリ哲学へのアプローチは主に現象学的な観点からなされていたと言える。もちろん、アンリ哲学の意義を正当に評価する場合、アンリ哲学が、現象学のなかでいかなる位置づけを持つか、また、アンリ哲学が現象学をいかに刷新しようとしていたか考察することは非常に重要な点であるが、しかし、アンリ哲学がそうした現象学的なアプローチだけで汲み尽くせるものではないことも確かである。

(2) とりわけ、研究代表者は、本研究の開始時まで、現象学的な側面からアンリ哲学にアプローチしてきたが、そうしたアプローチを通してだけでは汲み尽くせないアンリ哲学の側面があることに気づき、とりわけ、そうした側面を、アンリのマルクス解釈、キエルケゴール哲学からの影響、そして、ニーチェからの影響という三つのポイントに絞って考察して行くことが有効であることに気づいた。

(3) また、研究の背景でも触れた、日本におけるアンリ研究の状況が本研究のもう一つの目的を動機づけるものとなっている。つまり、そこでも触れたように、研究開始当時の日本におけるアンリ哲学研究は、幾人かの研究者が個別に研究に従事しているだけで、研究者間の横のつながりが存在しない状況であった。そのため、研究者間の情報交換も不十分であり、アンリ哲学についての共同研究や研究会なども開催されず、したがって、アンリ研究そのものの裾野の広がりや活性化にはつながりにくい状況となっていた。

(4) こうしたことから、本研究は、日本におけるアンリ研究の社会的基盤になりうるものを形成することをその目的に掲げた。具体的には、研究会や学会とまではいなくても、せめて研究者間の連絡会のようなものを形成し、将来的には、アンリ哲学の社会的受け皿となるような組織に発展させていける、その基盤を作り上げることを目的として目

指した。

(5) さらに、日本におけるアンリ研究の活性化をめざすためには、海外の研究者との連携をとることが必要不可欠である。そのために、本研究では、可能な限り多くの海外のアンリ研究者と連絡を取り、海外のアンリ研究の情報をキャッチすると同時に、その成果を十分に取り入れ、日本におけるアンリ研究の水準の向上を目的として掲げた。

3. 研究の方法

(1) マルクス、キエルケゴール、ニーチェの思想、および、それらの哲学者に対するアンリの解釈が、アンリ哲学の形成にどのような影響を与えたかという点を考察し、そこから、アンリ哲学の持つ特異性、意義を浮かび上がらせるという方法を取る。

(2) アンリ研究の社会的基盤作りに関しては、国内の多くの研究者に連携を呼びかけ、将来的に、アンリ研究を組織化していくための礎石作りを行う。

(3) 日本におけるアンリ研究の水準の向上のために、積極的に海外の研究者と連携する。具体的には、海外の学会に参加して、研究発表を行うとともに、アンリ哲学の紹介と、海外のアンリ研究者の仕事の紹介を兼ねて、その著書の翻訳を手がける。さらには、国際ミシェル・アンリ学会と連携、情報交換を活性化させる。

4. 研究成果

(1) まず、本研究の大きな成果の一つは「日本ミシェル・アンリ哲学会」の設立であったといえる。2009年の春から、設立の準備を開始し、まずは、ミシェル・アンリに関心を持つ、幾人かの研究者に呼びかけ、どのような形での組織にするかという点から話し合いを始めた。当初は、厳密な形での学会のようなものでなく、研究者間の連絡会のような体制を考えていたが、積極的に協力を申し出てくれた研究者たちと話しあう中で、「学会」として設立する方向へと話が進んでいった。

(2) 最終的に、山形頼洋氏（同志社大学）、庭田茂吉氏（同志社大学）、松葉祥一氏（神戸市看護大学）、中敬夫氏（愛知県立芸術大学）、榊原達哉氏（徳島文理大学）、米虫正巳氏（関西学院大学）、伊原木大祐氏（北九州市立大学）、そして、研究代表者が「呼びかけ人」となり、設立趣意書とともに各方面に参加を呼びかけた。その結果、40人程度の賛同者が集まり、2012年6月現在は会員は50名にのぼっている。

(3) 2009年8月には、同志社大学にてキックオフ会議を開催し、そこで会則を制定するとともに、運営委員の選定を行い、学会の組織作りを行って、実質的な学会活動を開始した。研究代表者は事務局担当を務め、現在まで事務局の作業を担当している。

(4) 「日本ミシェル・アンリ哲学会」は、基本的に年一回の研究大会の開催と年一回の学会誌「ミシェル・アンリ研究」の発行を主な活動としている。大会はこれまでに、設立記念大会(2010年3月)、第二回大会(2010年7月)、第三回大会(2011年6月)を行い、2012年6月9日に第四回大会を開催予定である。また、学会誌である「ミシェル・アンリ研究」は、第一号を2011年6月に、第二号を2012年5月に発行した。

(5) この「日本ミシェル・アンリ哲学会」の設立によって、日本におけるアンリ研究が活性化の兆しを見せはじめたことは否定できないと言える。「日本ミシェル・アンリ哲学会」の大会において、アンリ哲学の研究発表が活発になされることはもちろんのこと、その他の学会でも、徐々にアンリ哲学に関する発表は増えているし、また、他の学会や研究会がアンリ哲学に関する企画を立てる機会も徐々に増えている。特に、2013年3月には、ASPLF(Association des Sociétés Philosophiques de Langue Française)の中間学会を京都大学にて開催する予定であるが、そこでは、ルーヴァン・カトリック大学のミシェル・アンリ文庫の所長を務めるジャン・ルクレール氏を招くことになっており、この中間学会全体のテーマを「ミシェル・アンリ哲学」に設定して、その企画を日本ミシェル・アンリ哲学会が担当することになっている。

(6) また、この研究の一貫として、研究代表者は、研究期間中二度にわたってヨーロッパを訪問し、プラハでアンリ関係のコロックに参加して、研究発表を行うとともに、ヨーロッパ各地を回って、アンリ研究の第一線の研究者と情報交換を行った。プラハでの研究発表は、La chair et la vie dans la phénoménologie de l'affectivité chez Michel Henry と題する発表を行い、アンリにおける身体、生命、感性の問題を、メルロ＝ポンティにおける肉の存在論やベルクソンの生命論などと比較検討し、存在論そのものを乗り越えようとするアンリの生命の現象学の意図を浮かび上がらせた。こうした研究代表者の活動により、海外からも「日本ミシェル・アンリ哲学会」の存在が認知され、ドイツ、フライブルク大学のロルフ・キューン教授からも、共同研究の誘いを受けている

し、また、こうした交流がもとになって、研究代表者は、ドイツで出版されるミシェル・アンリとハイデガーの比較研究を扱った論文集に論文を寄稿するよう依頼を受けた(現在、編集中で2012年中に刊行予定)。その他、様々なところで、ミシェル・アンリ研究をめぐる国際的な活動が顕著になってきている。

(7) 2011年にパリを訪れた時の大きな目的は、アンリ哲学の研究者であるとともに、独自の哲学を展開しているポール・オーディと会い、彼の著書 Michel Henry : Une trajectoire philosophique (邦訳タイトル:『ミシェル・アンリ——生の現象学入門』、勁草書房)の翻訳について打合せすることであった。現在、この翻訳は2012年9月の刊行に向けて、原稿の最後の仕上げの段階に来ている。日本においては、ミシェル・アンリ本人の著書の翻訳はある程度揃ってきているが、ミシェル・アンリ哲学の概説書が存在せず、ミシェル・アンリ哲学研究の活性化のためには、その点が危惧される点であった。そうした問題を少しでも解消するために取り組んだのがこの仕事であった。

(8) また、研究期間中に刊行した著書『経験のアルケオロジー——現象学と生命の哲学』(勁草書房、2010年)も、この研究の成果が反映された大きな仕事の一つに数え上げることができる。そこでは全10章のうち、1章しかミシェル・アンリに割いていないが、しかし、著書の全体がミシェル・アンリ哲学を中心にして構成されている。つまり、ミシェル・アンリ哲学そのものの成立過程を追うような研究ではないが、ミシェル・アンリが持つ問題意識を、フッサール、メルロ＝ポンティ、ベルクソン、ハイデガーなどの哲学のうちから拾い出し、そうした議論の積み重ねのなかから、ミシェル・アンリ哲学の狙いと意義を浮かび上がらせることができた。この著書は、その著書全体を「ミシェル・アンリ研究」として公言しており、ミシェル・アンリに関心を寄せる研究者や学生にとって多に資するものと思われる。

(9) その他、研究期間中のミシェル・アンリに関する研究としては、Être et Parole : Heidegger et Henry という論文を執筆し、ハイデガーの芸術論および言語論とアンリの芸術論および言語論を比較検討し、ハイデガー哲学の本質的思考を乗り越えようとするアンリ哲学の本質を明るみに出した。これは、ドイツ語に翻訳され、2012年にAlber社から刊行される論文集に掲載される予定である。

(10) また、2011年12月には、河合文化教育研究所主宰の臨床哲学シンポジウムでパ

ネラーを務め、「思い出せない他者・忘れられない他者」と題する発表をおこなった。ここでは、レヴィナスの他者論とミシェル・アンの他者論を比較検討し、アンの生の現象学が持つ、レヴィナス思想との共通性と差異を浮き彫りにした。この研究の成果は、2012年12月に河合文化教育研究所から出版される『臨床哲学の諸相——自己と他者』に所収され、刊行される予定である。

(11) さらに、ミシェル・アン哲学を、現代哲学の中に位置づける研究に関してであるが、この研究に関しては、必ずしも研究発表に至るまでの成果を挙げることができなかったことが残念であった。マルクス、およびアンのマルクス解釈に関する詳細な研究に取り組んだが、アンのマルクス解釈にしる、キエルケゴール解釈にしる、ニーチェ解釈にしる、その背景にはまずもって、アンのヘーゲル解釈が控えており、アンが、自ら大きな影響を受けたと告白しているヘーゲル哲学との関係でアン哲学の意図を解明するという仕事なしに、マルクス、キエルケゴール、ニーチェとアンの関係についての研究に着手することの不十分さが確認された。そうしたことから、ヘーゲル哲学の研究などにも着手したが、こうした研究に関しては、研究期間中には、結局、発表できるまでのまとまった成果を得ることはできなかった。しかし、今後、ミシェル・アン哲学の全体像を解明するためのしっかりとした視野を確保できたことは大きな成果であったと言える。この課題は、今後の大きな課題として残ることになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

川瀬 雅也、「アンの情感性の現象学における肉と生命」、科学研究費補助金(基盤B)「多極化する現象学の新世代組織形成と連動した「間文化現象学」の研究」研究成果報告書、査読無、2008-2011年度、2012年、379-394ページ。

川瀬 雅也、「現実感の現象学——ミシェル・アンと木村敏」、『立命館文学』、査読無(依頼論文)、第625号、2012年、223-235ページ。

川瀬 雅也、「生命と文化——アンとベルクソンの近さと遠さ」、『ミシェル・アン研究』、査読有、第1号、2011年、59-76ページ。

川瀬 雅也、「時間性と〈文化の危機〉——アンからメルロ＝ポンティを見る——」、『現象学年報』、査読無(依頼論文)、第25巻、2009年、49-58ページ。

〔学会発表〕(計5件)

川瀬 雅也、「思い出せない他者・忘れられない他者」、第11回臨床哲学シンポジウム、2011年12月11日、東京大学

川瀬 雅也、「生命の現象学と〈経験のアルケオロジー〉」、日本ミシェル・アン哲学会第三回研究大会、2011年6月11日、立命館大学

Masaya KAWASE, “La chair et la vie dans la phénoménologie de l’ affectivité chez Michel Henry”, Corporeité et affectivité : Michel Henry et les philosophes du corps, 2010年11月5日, Institute of Philosophy, Charles University, Prague (Czech).

Masaya KAWASE, ” Urimpression et Lebenswelt dans la phénoménologie de Michel Henry ”, 間文化現象学ワークショップ、2010年5月14日、立命館大学

川瀬 雅也、「生命と文化——アンとベルクソンの近さと遠さ——」、日本ミシェル・アン哲学会、2010年3月26日、同志社大学

〔図書〕(計2件)

川瀬 雅也、勁草書房、『経験のアルケオロジー——現象学と生命の哲学』、2010年、358ページ。

川瀬 雅也、梓出版社、『ヨーロッパ現代哲学への招待』、2009年、150-175ページ。

〔その他〕
ホームページ等

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~michelhenry/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川瀬 雅也 (KAWASE MASAYA)

佐世保工業高等専門学校・一般科目・准教授

研究者番号：30390537

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし